

木質文化財研究会 2014年度 第4回 見学・講演会

木質文化財研究会では、12月9日（火曜日）に、今年度第4回目の企画として、“漆の工藝と科学”をテーマに講演・見学会を開催いたしました。12月の第一週には、同じく京都にて、“漆サミット”が開催されており、漆と文化財に興味関心を寄せる関係者にとって、まさに機を得た見学・講演会“漆の工藝と科学”の開催となりました。木質文化財研究会では、見学・講演会での様々な分野の専門家の方々との対話を通じ、既存の文化財分類の枠組みを超え、多種多様な“木質文化財”についての理解を深めてまいりましたが、“漆”をテーマにするのは、初めての試みです。今回の漆に関する見学・講演会の企画・開催・運営におきましては、京都市産業技術研究所・高分子系チームの全面的な協力を得ました。この場をお借りして、改めてお礼を申し上げます。

講演会では、京都市産業技術研究所・研究室長・理事、大藪泰氏、京都市産業技術研究所高分子系チームの安藤信幸氏、比嘉明子氏、それぞれから話題をご提供いただきました。

トップバッターの太藪泰氏は、長年、工芸材料チーム（現高分子系チーム）・リーダーとして漆研究に従事され、“漆を科学する会”の主宰、“漆—その科学と実技”（理工出版社、1999年）を共同執筆、出版されるなど、漆研究の第一人者でいらっしゃいます。太藪氏からは、漆の基本情報、世界における漆の種類と植生や、漆の採取方法、漆利用の変遷などについて、丁寧に概説いただきました。なかでも、参加者を釘付けにしたトピックは、伝統的な材料である漆を、近代文明の象徴ともいふべき乗用車の表面塗装に用いるというものでした。（数写真）漆という素材は、日頃は、伝統文化的側面や、文化財の意匠などに目を向けられがちですが、漆をより汎用的に（かぶれにくい、作業性を上げる、など）高分子科学の手法によって改質し、日常的により多く用いるための豊富なアイデアから実用品（漆塗りのエレベーター扉。漆塗りスマートフォンや、ネイルチップ。注・女性の付け爪。）を生み出し、さらに未来型の新素材として提案するパワフルな姿勢に、目を奪われました。



続いて、京都市産業技術研究所高分子系チームの比嘉明子氏からは、研究所で行ってられる漆工研修や、関連業界との連携について、話題提供を頂きました。産業技術研究所では、毎年、伝統産業技術後継者育成研修 漆工コースとして、漆工コース約8名、漆工応用コース約6名の研修生を受け入れておられます。漆工コースでは、塗漆技法、蒔絵技法、乾漆技法など実技のほか、漆工の技術や歴史などの座学があり、応用コースでは、蒔絵などの加飾や、螺鈿など、京漆器に不可欠な専門技術を学ぶシステムとなっています。歴代の講師は、漆芸の人間国宝の方を含め、日本を代表する漆の工芸家として著名な方々が務められ、日本の漆芸技法の継承において、大変大きな役割を果たしておられます。

講演会では、伝統技術と先端技術を両輪として、京都ブランドの漆工産業をどのように支えておられるかについて、ご紹介いただきました。その後、京都市産業技術研究所高分子系チームの安藤信幸氏、橘洋一氏に率いていただき、木工芸に関わる実務家、大学教員、公的研究機関の研究者など、15名の参加者は、2班に分かれ、漆に関連する研究室を見学させていただきました。見学時にも、一人の韓国からの漆工コースの研修生が、黙々と課題製作に取り組んでおられました。京都というローカル文化と伝統技術を深めつつ、グローバルな貢献に努めておられる研究所の象徴であるように感じたことでした。

木質文化財研究会では、研究会ホームページの充実や、メーリングリストを通じた研究会・シンポジウムの開催通知など、木材学会会員、関係者皆様への情報共有に努めておりますが、唯一無二の文化財に関わる見学会・講演会ならではの非公開情報も多くあります。是非一度、実際に講演・見学会にご参加いただければ幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

参考：京都市産業技術研究所：<http://tc-kyoto.or.jp/>

文責・木質文化財研究会 横山操